

「こころのパン 2003」イスタンブール報告

AICAT 副代表理事 中浜慶和

期間：2003年3月14日～22日

参加者：作家 出原司 磯田皓 片山雅史 島根紹

AICAT 中浜慶和 イナン・オネル

現地通訳・調整 Ibrahim Ozalp Sammas Ugurlu 山下千絵 田中幸恵

現地パートナー：Mimar Sinan 大学 Degirmendere 市

1. 「こころのパン」イスタンブール展示会

3月14日に関空から片山雅史先生、出原司先生が搭乗、同便に成田より中浜、イナンが搭乗してイスタンブールに出発、午後8時過ぎに到着。島根紹先生は同日モスクワ経由で出発、15日未明に到着。磯田先生は16日に成田より出発、同日夜に到着。

15日より早速ミマル・シナン大学のオスマン・ハムディ・ホールで作品の開梱、展示作業に取りかかる。昨年9月より3回、美術梱包ヒグチから本多浄人さんの派遣指導を受けてきたことで、現地側のスタッフも運送及び作業手順を習熟しており、ミマル・シナン大学美術学部フェリト・オズシェン教授まで参加されて、決め細やかな指示を頂いた。大学内にある展示ホールであるため、開梱段階から美術学部の学生たちが作品を「鑑賞」し始めることになった。

“RUHUN GIDASI 2003”イスタンブール展のオープニングは17日17:00より行われた。ミマル・シナン大学イスメット・ウィルダン・アルプテキン学長、ベリル・アヌランメルト副学長、フェリト・オズシェン教授を始め美術学部関係者、デイルメンデレ市エルトゥルル・アカルン市長、メフメット文化担当、イズミット市立美術館のジャーナン・チャ・ラヤン館長始め、市民、学生、教育、美術、経済界を含めて120名もの方々が参加された。特にイラク戦争が始まろうとしている中でオープニングを迎えただけあって、多くの方々から参加された作家並びにプロジェクトに対して格別の賛辞を頂いた。

なお、ミマル・シナン大学は本年(2003年)が創設120周年に当たり、「こころのパン」“RUHUN GIDASI”プロジェクトが120周年記念事業の一環に加えられることになりました。大地震がもたらす災害から、このような新しい活動が誕生し、それがトルコにおける建築美術の最も著名な大学の歴史の1ページの中に加えられたことは、携わる者として大きな喜びでもある。

本プロジェクトはいつも会場入口に一冊の大型ノートを設置して、来場者のメッセージを受けているが、今回も多くのメッセージが寄せられた。なかには数ページにわたって熱い思いを書かれたものまでであるが、そのうちから、ほんのいくつかを紹介する。

- ・「今朝、大学に来たとき、とても驚きました。うれしくなり、悲しくなり、あこがれました。ちょうど、地震で家を失ったときのような驚き！瓦礫の下に残ったわた

しの過去のよう。生き残ったひとりとして、感謝します。」 ベン・ジェム
(フェリト教授の教え子であるベンさんは、彫刻学課の2年生で、最初ホールに入
って作品を観て、作家からのメッセージを読んだ途端、ホールから逃げ出した。や
がてしばらくしてから、再び展示ホールに入り、食い入りように一つひとつの作品
を鑑賞し始めた。彼女はデイルメンデレ市の出身であの大地震の被災者でした。)

- ・ 「たくさんの美術家の作品が一箇所に集められた。わたしたちよりずっと遠い人た
ちなのに、わたしたちの視野を広げ、心を開いてくれることが、わたしには不思議
で意味深く思われました。グローバリゼーションは資本においてでなく、わたした
ちの心の中において起こるべきです。」 マージット・オブズ
- ・ 「悪き物どもは善き者たちをいつまで汚すのか！」 シャーヒン

展示会は3月25日まで開催された。その後、再び梱包されて、デイルメンデレ市に返
送された。

2. シンポジウム「災害と芸術」

3月18日10:00から16:00まで昼食をはさんで2回、ミマル・シナン大学ホールで
磯田、島根、出原、片山各先生方、デイルメンデレ市エルトゥールル・アカルン市長、
イズミット市立美術館ジャーナン・チャ・ラヤン館長、中浜及びイナンにより、フェリ
ト・オズシェン教授の司会で行われた。イラク戦争開始の影響もあって参加者は少数で
あったが、戦争と芸術に関する討議もなされた。

先生方からは、作品の創作、美術の想像性について、あるいは地震や戦争の体験、そ
こから芸術を目指している自分に与えた影響に関してそれぞれ講演が行なわれた。中浜
とイナンは、このプロジェクトの生い立ちと今日までの道程を語り、アカルン氏とジャ
ーナン氏は地震被災者に対する美術による心の支援の重要性を訴えた。

シンポジウムの中で、イラク戦争の危機に直面している時期であったため、美術を目
指す学生から「芸術が戦争の悲惨さや酷さを糾弾はできるが、戦争を食い止める力はない
のだろうか」と問題が提起された。今日の前の戦争に対しては誰も、なにものも無
力かもしれない。だからこそ、平和を作品のなかに込めて、継続して訴え続けることが
芸術の使命にあるのではないか。一人ひとりで思い悩まず、志を共にする作家たちが集
って共同制作を行うなど具体的な討議もなされた。

3. ワークショップ

3月20日、10:00から15:00まで出原司先生による、木版制作が行われた。西洋の
石版と日本の木彫を融合させた手法によるもので、材料の提供は出原先生と京都市立芸
術大学によるものである。

参加者は予定を上回って20人を超えて盛況となった。出原先生が創作した幅3m大の
ドルフィンを参加者が一部ずつを分担して、自分の作品としての木版を作成した。木版
はミマル・シナン大学提供の画用紙に刷り上げた。完成の都度、参加者の周りから歓声

が上がった。それぞれを制作した参加者たちは、自分の作品を持ち帰った。デイルメンデレからの参加者もあり、被災から新たな出発を始めた彼らの家の中に、この作品が飾られ、力と希望をもたらすことができるように祈った。

4．特記すべきこと

3月19日からイラク戦争が始まる中を、大地震被災者支援のための「こころのパン」プロジェクトが開催できたことは、出発前から在日トルコ大使館、在トルコ日本大使館、在イスタンブール日本総領事館はじめ各方面の方々からの的確な情報や励ましがあったからで、ここに感謝を表します。また、かかる時期にもかかわらず、参加を頂いた支援作家の先生方に心からの敬意と感謝の気持ちをささげます。

イスタンブールは、前回の湾岸戦争と同様に、今回のイラク戦争に関しても極めて安全で平穏な状態にありました。イスタンブールはイラク国境から最も遠い位置にあり、国際空港がある、トルコ第一の大都市であり、バスでなら数時間でギリシャ、ブルガリヤに行ける。わたしは日々、支援をしてくれている皆さんから、あるいは日本大使館、総領事館、地元の観光会社などから情報を入手して、参加者の皆さんに伝えておりました。日本大使館、総領事館からは、イラク国境沿いの地方には行かないこと、米英大使館や総領事館には近づかないこと、高級ホテルへの宿泊、立ち寄りには避けること、デモなど人が集まっているところには近づかないことといった注意を受けていた。わたしたちが宿泊していた平均的な観光客向けのLion Hotelは、観光客で大変にぎわっていた。過去の訪問と同様な状態で、新聞とテレビを見ない限り、日本にいるときと変わりがなかった。飛行機もイラクを除く中東各国にも若干ルートは変更したが、運行は中止されずにいたという。

海外からの進出企業も多数あるが、他の外国の企業は通常と変わらず営業を行っている中を日本企業に限ってイラク戦争が勃発するやいなや、幹部や社員が一斉に帰国してしまった模様で、帰国前に訪問した日本総領事館では、このことに関していささか訝しげなことだとの感想を伺った。日系企業に勤務する現地社員の間には寂寥感をもたらさないように願った。

5．最後に

今回もトルコ国内にあって、多くの方々から多大な支援を頂いた。通訳にとどまらず、展示会の作業、イラク戦争に関する情報の入手、参加頂いた先生方の身の回りなどの気配りなど、今まで同様に大きな力を発揮したイブラヒム氏、シャンマス氏、そして今回新たに参加して下さった山下千絵氏、田中幸恵氏、またわたしの当初からのトルコでの活動を支援してくれている小沢淑子氏、さらに関邦江氏にも心からの感謝を捧げる。パートナーであるデイルメンデレ市の文化担当のメフメット氏、バハル氏、また企画段階から実施にいたるまで、絶えずバックアップを欠かさず与えてくれているイズミット市立美術館のジャーナ館長、そして多数のサポーターの皆さん、どんなに遠くにいてもいつも駆けつけて参加される、笑顔の絶えないイナンのおかあさんとお兄さん(シナン氏)

にも尊敬のこころを捧げる。日本総領事館の石原猛副領事には、多くのアドバイスと支援を頂戴した。

諸経費に関しては、経済面かつ役務やサービスの貴重な支援を企業、団体、個人の方々から受けており、それを元に活動を図っているが、長期にわたるプロジェクトであり、経済情勢の大きな変化により思わぬ出費もかさんできている。従って、今回は参加を頂いた作家の方々には、航空運賃と宿泊費をご負担いただくことになってしまった。心苦しい次第であります。また、現地での通訳や調整を引き受けてくれている方々にもほとんど金銭的な報酬は差し上げることが出来なかった。「こころのパン」プロジェクトは9000 km隔てた両国の友情と温かな「こころのパン」に支えられていることを明記しておきたい。